

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00649

研究課題名(和文) 構文文法から見た言語変化：主観的意味機能の発生を中心に

研究課題名(英文) A Constructional Approach to Language Change

研究代表者

米倉 陽子 (YONEKURA, Yoko)

奈良教育大学・英語教育講座・准教授

研究者番号：20403313

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語迂言的進行形 (be + V-ing) と受益者受動構文の近代英語期以降における拡大の解明に構文文法がどのように寄与するのかという問題に取り組んだ。迂言的進行形については、この構文が最近、感情状態動詞との共起を許しつつある現象に絡めて、その発達は「結果指向」へ向かう潮流という、より大きな文脈で捉えるべきと主張した。受益者受動構文については、前期近代英語期のコーパス調査を行い、構文が芽吹く際には、十分な使用頻度に支えられたチャンクが存在が役割を果たしうることを示した。他のゲルマン言語の該当構文との比較も行い、受益者受動の拡大は与格標示衰退だけに帰されるものではないことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、英語迂言的進行形の比較的新しい用法と受益者受動構文の通時的発達の分析を通して、言語変化のメカニズム解明に貢献したことにある。まず迂言的進行形の発達については、進行形だけに着目するのではなく、英語の時制・アスペクト体系と言う、より大きな文脈で言語変化を考えなければならないことを示した。次に受益者受動構文の発達については、この構文の受益者項が、「付随的参与体を表す存在から事態に必要不可欠な参与体を表す存在へ」という変化を経たことが重要である。構文中のある参与体が担う意味役割の変化は、単なる与格標示の喪失だけでなく、構文そのものの意味変化と言う文脈での分析の必要性を示した。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on (1) the diachronic development of the periphrastic progressive construction and (2) the expansion of the recipient passive construction (RP) in English.

I claim that the development of the aspectual and modal uses of the English periphrastic progressive are appropriately grasped in a "global" context of language change taking place in English. This global change is also relevant to another "local" change associated with the progressive form (i. e. be + V-ing); a recent revival of the aspectual form centered around stative verbs like "love." The entrenchment of the RP, on the other hand, was arguably triggered by chunk phrases (or collocations) with a reasonable frequency. The constructional meaning of the ditransitive construction is also responsible for the spread of the recipient passive.

The analyses of (1) and (2) can be combined to suggest that seeing grammar as 'Constructicon' may pave the way for exploring how grammar systems in language have been formed.

研究分野：英語学

キーワード：文法化 言語変化 構文 進行形 受益者受動構文

1. 研究開始当初の背景

英語における迂言的進行形 (*be + V-ing*) の歴史的発達は今から研究対象になってきたものの、解釈的用法 (例: *You're kidding!* / *In joining the Euro, we might be giving away our sovereignty.*) のように、本来であれば単純現在形を使えば事足りるとされる新用法や、あるいは動詞 *know* や *love* を使った進行形 (例: *I'm loving it.*) のように、進行形ではなくむしろ単純現在形を使うのが文法的に正しいと思われる用法が最近になって見られることは、言語学ではほとんど注目を集めてこなかった。これらの用法を扱った先行研究は非常に数が限られており、最近の論考を探しても、わずかに **Kranich (2010)** や樋口 (2014) 等の数点があるにすぎない。

また、英語受益者受動構文 (二重目的語構文の主題 (**Theme**) 項ではなく、受益者 (**Recipient**) 項を主格主語とする受動態文、例: *I was given this ring by the Queen.*) の発達についても、14世紀に初例が現れたことはほぼ確実と見てよいが、初例が現れたのちも長く英語において不人気な構文であり続けた理由や、具体的にどのように英語で拡大していったのかを詳細に調べた先行研究は、後期近代英語期の受益者受動の分布を調査した **Yonekura (2018)** 等を除けば、ほぼ皆無と言ってよい。

加えて、英語迂言的進行形および受益者受動構文の通時的発達の研究のみならず、構文がどのように変化していくのかを認知文法の知見を用いた研究そのものが、質・量ともにまだ足りない。構文文法はもともと、共時的言語現象の分析という文脈で誕生した言語理論なので、通時的言語変化に絡めた研究の層が薄いのは、当然と言えば当然である。このような状況なので、言うまでもなく、認知構文文法が通時的言語発達にどのように貢献しているのかについても、知見の蓄積が十分になされているとはいえない状況である。

2. 研究の目的

本研究は、英語迂言的進行形に見られる後期近代英語および現代英語期における新用法の発達および英語受益者受動構文の近代英語期における確立・拡大が通時的にどのように進んできたのか (あるいは進行中なのか) を分析することで、ある言語体系内において、構文がどのように変化していくのか、また他の構文とどのような構文ネットワークを形成していくのかを示すことを目的とする。それにより、構文文法の枠組みで言語変化を捉えることは適切なのか、適切であるとすれば、それはどのように言語変化研究に組み入れられるべきなのかについての事例研究を提示する。構文文法の枠組みでとらえることで、言語変化のどのような側面が可視化されるのかという問題の解明にも貢献できるものと考えられる。

3. 研究の方法

まず英語受益者受動構文の発達調査でとった手法を述べる。後期近代英語コーパスとして **CLMET3.0 (the Corpus of Late Modern English Texts 3.0)**、前期近代英語コーパスとして **PCEEC (the Parsed Corpus of Early English Correspondence)** および **LC (the Lampeter Corpus of Early Modern Tracts)** を使用し、例の採取を行った。前期近代英語例については、後期近代英語の調査 (**Yonekura 2018**) に基づき、受益者受動構文を比較的早くから許容していた可能性のある7つの動詞 (*offer, deny, permit, promise, show, teach, tell*) の分析対象構文例を調査対象コーパスから採取した。採取に際しては、可能な限りの異綴りをコンコーダンサー **AntConc3.4.4w** にかかけ、ヒットした例すべてに目を通し、二重目的語構文の受動態 (受益者受動例および主題受動例と前置詞与格構文例) をくまなく拾うという手法をとった。また、英語以外の言語における受益者受動構文の状況調査として、ノルウェー語、スウェーデン語、オランダ語、アイスランド語における該当構文についてもとりあげ、分析を行った。

次に英語迂言的進行形の発達調査でとった手法を述べる。本研究では、本来は迂言的進行形ではなく、単純現在形を使えばよい (あるいは使わなければならない) と思われる用法について、現在時制進行形と単純現在形との比較に的を絞った。これは、現在時制と他の時制とでは、明らかに解釈の仕方に差異があるとする先行研究 (たとえば **De Wit et al. 2013**) の主張に従ったものである。そのうえで、現在進行形の形で現れる場合と単純現在時制形で現れる場合との間に見られる意味的差異の点から、現在進行形のプロトタイプ的な意味からの拡張として、解釈的進行形用法や *love* 等の感情動詞を使用した進行形用法を構文ネットワーク内に位置づけられるか否かを分析した。すなわち、英語史において迂言的進行形がアスペクト機能を担う構文として根付く中で、これらの新しい進行形用法がなぜ現れたのか、その出現は英語全体における大きな通時的流れにいかに関与しているのかに着目した。

4. 研究成果

本節では本研究の研究成果と、将来の課題として残された点をあわせて述べる。

まず、英語受益者受動構文の発達については以下のことが分かった。

(1) 英語受益者受動の黎明期においては、二重目的語構文の **Theme** (主題) 役割を担う項が、名

詞句であるか節構造であるか否かの違いが、受益者受動構文導入に一定の役割を果たしたことが、前期近代英語コーパスデータからも裏付けられた。この傾向はとりわけ動詞 **permit** と **tell** について顕著である。ただし、調査対象として使用した 2 つのコーパス (**PCEEC** および **LC**) をくまなく検索しても、調査対象 7 動詞の二重目的語構文受動例は非常に数が少なく (受益者受動例と主題受動例あわせて 379 例)、特に動詞 **show** については、考えられる変異体をすべて検索して二重目的語構文の受動態採取を試みたが、2 つのコーパスから合計で 13 例しか見つからなかった。これは、**show** が二重目的語構文受動よりも、前置詞と格構文受動 (例: *The picture was shown to the lord.*) を好むことも関係していると思われる。いずれにせよ、データ補強のためにさらなるコーパス調査を継続する必要性が今後の課題として残されたと言える。

(2) **for** 前置詞と格構文に対応する二重目的語構文の英語受益者受動は、現代英語においても、動詞によっては非常に嫌われている。たとえば **buy** や **bake** の受益者受動構文は許容されても、**peel** の受益者受動構文は、インフォーマントの反応から判断するに、現代英語においてもほぼ容認されない。このように、同じような意味クラスに属すると思われる動詞群の間でも、その文法的振る舞いは必ずしも均質的ではない。しかしこのような現象は何も受益者受動に限った話ではなく、一般的傾向からの外れ値がある程度見られることは、言語ではよくあることである。したがって、外れ値の存在を以って、一般的傾向を即座に否定することは、言語学的妥当性があるとは言えない。

(3) 明示的与格マーキングの消失は、ただちに受益者受動の導入が可能になることを意味するとは限らない。英語では、明示的与格マーキングが消えた後も、受益者受動が一般的になるのには数百年を要していることが本研究のコーパスデータからも示された。たとえば 20 世紀初頭においても、**give** の受益者受動は主題受動をわずかに数の上で上回る程度であった。上記 (2) に記した **peel** 等の作成動詞の受益者受動が一律には受容可能となっているわけではないことも、この事実を裏付ける。また、オランダ語では、明示的与格屈折がすでにないにも関わらず、受益者受動はいまだに発達していないことも、この見解を支持するものである。

(4) 英語以外のゲルマン語のデータを分析すると、受益者受動の発達にはさまざまな要因が絡んでいるのは明らかである。たとえば明示的与格マーキングがまだ保持されているアイスランド語では、典型的な主語位置に現れた受益者項は、与格標示を受けながらも、実質的には主語と同じように振る舞う。したがって、受益者受動の発達には、トピック性の問題も絡んでいることがわかる。また、受益者受動が発達するには、二重目的語構文における受益者項が **Primary Object** という、二重目的語構文によって表される事態の「必須参与体」として再解釈され、本来は随意的であったトピックの性質を統語的にも保障される必要がある。この統語上の保証は典型的には主格マーキングや、主動詞との呼応という面に現れる。このような解釈上のシフトには、本来は与格で表される付随的事態参与体としての側面が強い受益者項であっても、無生物であることが多い主題項よりも焦点を当てられ、**Primary Object** として解釈されなおされるだけの価値があるという、話者の認知的判断が少なくとも部分的には寄与したと考えられる。

(5) 以上述べてきたように、さまざまな要因が相互作用しながら、受益者受動構文と言う文法的構文を形成していく様子は、言語を「複雑系 (**complex system**)」と見なす根拠を提供してくれる。

次に英語迂言的進行形の通時的発達について分かったことを述べる。

(6) 英語迂言的進行形とおぼしきフォームは古英語からあるのだが、アスペクト表現としての機能が確立したのは中英語末期から初期近代英語期にかけてである。現代英語での使用は書き言葉よりも話し言葉で頻度が高い。さらに英語迂言的進行形はフランス語迂言的進行形よりも使用頻度が高く、用法の幅も広い。

(7) 英語に限らず、迂言的進行形の文法的機能を考える際には、対応する単純時制形との比較が重要である。英語では **perfective** 概念の表示を担っていた接頭辞 (**ge-, be-, for-, to-**など) の衰退、単純時制形の担う機能範囲の縮小が、迂言的進行形の発達に影響した。なお、英語における接頭辞の衰退は、進行形の発達に関係したばかりでなく、受動態や他動詞構文の発達にも関わっており、一見些末な形態音韻的言語変化が、様々な意味機能的言語変化を引き起こしたことを示している。これは複雑系科学で言うところの「バタフライ効果」と言える。ただし **ge-** についても必ずしも **perfective** 概念にならない動詞例もあり、アスペクト的接頭辞の機能については引き続き検討が必要である。

(8) 解釈的進行形は単純時制形と交替しても微小な意味的差異しか生じないと指摘する先行研究もある (Leech et al. 2009 参照)。しかしそれでも、解釈的進行形も可能なところで代わりに単純時制形を使うと、どこかフォーマルで古風な響きはあるという。解釈的進行形と単純時制形と言う、真理条件的には相違ないように見える 2 つの構文であっても、語用論的な差異はある

とみてよい。進行形と対応する単純時制形の両方が可能な環境でも、進行形が使われると、どこか特殊な語用論的意味がでることは他言語でもよくある。これは、進行形だけに着目するのではなく、その意味機能を考える際には、相・時制体系全体に目配りしながらの分析が必要なことを示している。ただし、解釈的進行形がどの程度、現代英語に根付いていると言えるのかは、今後とも分析を続ける必要がある。

以上、英語受益者受動構文と迂言的進行形の通時的発達分析を通して得られた知見は、**Gildea and Barðdal (2020)** の提唱する概念「構文目録 (**Constructicon**)」、すなわち「ある言語における意味とフォームのペアである構文の目録」の存在を強く示唆する。複数の構文が競合しあい、補完しあい、連携しあいながら言語体系を形成し、またそれらの構文が言語体系自体からも影響を受けて変化することで、構文目録としての言語体系がさらに変化していく様子は、複雑系 (**complex system**) としての言語という考え方にも合う。言語を複雑系とみることは、言語変化分析だけでなく、規範文法 (**prescriptive grammar**) か記述文法 (**descriptive grammar**) かという二項対立をどうとらえるかにも関わってくる。このような「複雑系としての言語体系」へとつながる知見が出てくることは、本研究開始時には予期していなかった。この点を踏まえながら、さらに研究を進めたいと考えている。

<引用文献>

- De Wit, Astrid, Adeline Patard and Frank Brisard (2013)** “A contrastive analysis of the present progressive in French and English,” *Studies in Language* 27(4), pp.846-879.
- Gildea, Spike and Jóhanna Barðdal (2020)** “From Grammaticalization to Diachronic Construction Grammar: A Natural Evolution of the Paradigm,” manuscript in preparation.
- 樋口万里子 (2014) “Pickbnourn (1789) と進行形の制限, 九州工業大学大学院情報工学研究院 紀要 (人間科学篇) 27, 1-35.
- Kranich, Svenja. (2010)** “Interpretative progressive in Late Modern English,” in *Current Issues in Late Modern English*, ed. by Ingrid Tieken-Boon van Ostade and Wim van der Wurff, pp.331-357, Peter Lang.
- Leech, Geoffrey, Marianne Hundt, Christian Mair and Nicholas Smith (2009)** *Change in Contemporary English*, CUP.
- Yonekura, Yoko (2018)** “Accounting for Lexical Variation in the Acceptance of the Recipient Passive in Late Modern English: A Semantic-Cognitive Approach,” *Studies in Modern English* 34, 1-26.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yonekura Yoko	4. 巻 61
2. 論文標題 Review: Laurel J. Brinton "The Evolution of Pragmatic Markers in English: Pathways of Change"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in English Literature	6. 最初と最後の頁 137-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米倉よう子	4. 巻 8
2. 論文標題 英語受益者構文の拡大をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史言語学	6. 最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 米倉よう子
2. 発表標題 英語受益者受動の拡大をめぐって
3. 学会等名 日本歴史言語学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉よう子・田中真一（編著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 293（担当箇所 pp.182-198）
3. 書名 言語におけるインターフェイス（担当論文名 米倉よう子「英語受益者構文をめぐる構文文法と歴史言語学の交差」）	

1. 著者名 米倉 よう子、山本 修、浅井 良策 (編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448 (担当箇所 pp.410-421)
3. 書名 ことばから心へ (担当論文名 米倉よう子「外国語教育における言語学の有益性」)	

1. 著者名 南 佑亮・本田隆裕・田中英理 (編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 英宝社	5. 総ページ数 268 (担当箇所 pp.96-107)
3. 書名 英語学の深まり・英語学からの広がり (担当論文名 米倉よう子「新しい構文の芽生え：初期近代英語期における英語受益者受動」)	

1. 著者名 米倉よう子 (編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 240 (担当箇所ページ番号未定)
3. 書名 意味論・語用論のインターフェイス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------